

「鹿屋ふるさと探訪会」 令和5年11月25日 大始良方面

I 史跡の見学経路と概要

8:30 鹿屋市役所の駐車場 <トイレはバス停横>

8:50 1.永野田町の「永野田観音」：観音経信者の永田良吉が浅草寺から入手した観音像を、昭和13年11月に永野田部落民が安置した。観音経は観世音菩薩がよく衆生の諸難・苦悩を救済すると説く。

9:05 2.永野田町の「澱粉工場」：大正8年に大始良村長の永田良吉が東京の大倉財閥の最新鋭装置の日本澱粉を誘致し、現在も操業中（104年目）。鹿屋の初期の誘致企業。

9:15 3.永野田町の「国司塚」：720年大隅国初代国司陽侯史麻呂が鹿屋地方の巡検に来た際に、大隅隼人が急襲し、国司が息絶えたとされている場所で女人禁制。

9:25 4.永野田町の「庚申塔と田の神様」（車窓から）：庚申等は青面金剛像で四臂左手に日輪（太陽）、右手に月輪（月）を表し、左手に弓、右手は不明である。田の神様は如意輪観音像。

9:30 5.吾平町の樋渡橋「庚申塔」：青面金剛僧で左手に四臂日輪（太陽）、右手に月輪（月）を表し、左手に弓、右手は不明である。二鶏（雌・雄）、三猿（見ざる、言わざる、聞かざる）が配置。

9:45 6.南町の「含粒寺」：含粒禅寺は南北朝時代、島津氏七代元久の子、仲翁守邦が開山した。吾平町門前にあって隆盛を極めたが明治2年廃寺となった後、南の玄朗寺と合体させて含粒禅寺とした。

10:10 7.南町の「烏ヶ山の観音像・月待供養塔」：観音は、聖観音で容姿端麗で造形美と年代の古さで第一級のもの。月待供養塔は、江戸時代中期に作った月輪を背負った如意輪観音で珍しいもの。

10:20 8.南町の「兼成の墓」（車窓から）：「横山の合戦」で勝った肝付兼成は、南の内城に帰る途中、現在の烏ヶ山で竹藪の中に隠れていた志々目藤三義貞に殺された。畑の中に石碑がある。

10:35 9.獅子目町の「清水の石塔群」：戦国期にこの地方を支配していた肝付氏（橋口但馬守等）の石塔群。鎌倉時代にここに進出してきた富山氏の供養塔群。南北朝期にここに進出してきた平姓弥寝氏の供養塔群がある。又、文禄元年（1592）の「梅北の乱」に連座した咎で一族、家臣60余名と共に断罪（斬殺）されたという伊集院三河守久光の追善供養塔がある。

<トイレ休憩 大始良地区学習センター>

11:15 10.大始良町「参河（みかわ）神社跡」：伊集院参（三）河守久光を祀る神社。「梅北事件」で一族全員64人が処刑された。その後、疫病が流行り、死者が続出したので参河守を祀るために建てられた。

11:25 11.大始良町の「岩戸神社」：横尾岳の御在所山に御神体の巨岩があり、その下に小社が建てられている。そこは老人や婦女子の参詣は困難であった。そのため大始良宮下に近戸宮が建立された。鳥居の右側に庚申塔がある。これは青面金剛像八臂であり例のない珍しい庚申塔である。

11:35 12.大始良町の「教育者・池田俊彦宅跡（今は孫が住む）」（車窓から）：東京帝国大学の西洋史学科を卒業し、大正7年に学習院教授となった。昭和4年学習院を辞任し、郷党子弟の教育に尽くすため鹿児島県立第二中学校長に就任した。昭和天皇の家庭教師でもあった。

11:35 13.大始良町の「初代町長・竹内三平宅跡の竹藪」（車窓から）：竹内三平は、私財を投じて人材の育成、発掘をはかり、大始良を舞台にして政治、産業、教育分野のリーダーを育て、鹿屋市の発展の礎を作った人。獅子目、横山、南、西俣の耕地整理事業、今の浜田から吾平に至る道を完成。

11:40 14.大始良町の「大始良東集落センター横の篠塚板碑・忠魂碑・西南役記念碑」：西南戦争の忠魂碑には戦死者の名が、西南役記念碑には出征兵士の氏名と年齢が刻まれている。島津元久が室町期応永12年（1405年）建立した板碑もある。

11:50 15.大始良町の「龍翔寺跡」：日本百僧の一人に数えられる名僧の玉山玄堤和尚が、大始良城主の楡井頼仲の招きにより、鎌倉末期に大始良に「瑞雲山龍翔寺」を建立して初代住職となった。

11:55 16.大始良町の「大始良城と八幡神社」（行かずに遠望）：内城を中心として十二城から成りその規模は肝付氏の高山城をしのぐ。南北朝の動乱期に肝付兼成、楡井頼仲、畠山直顕、祢寝清成、島津氏久の順にこの城を巡って激しい攻防戦が繰り広げられ最後に島津氏が勝利を収めている。

<昼食>

13:00 17.大始良小学校の「池田俊彦先生顕彰碑と3戦役慰霊碑」（車窓より）：池田俊彦の郷里・大始良の有志が図って、没後15年に建てた顕彰碑。日清・日露・大東亜の戦役の慰霊碑もある。土日は校庭に入れない。正門の横（南側）に顕彰碑の上部が見える。

13:10 18.大始良町の「倭子の下」（車窓より）：伊集院三河守久光の息子・倭子（兼丸）が奸臣に殺されたと伝わる所で、小高い丘の上に石碑がある。県道のバス停近くの藪の中である。

13:30 19.浜田町の「玉山禅師上陸之地記念碑」と「呑海庵跡」：日本百僧の一人に数えられる名僧の玉山玄堤和尚は、2回唐に渡って修行した。2回目の帰国の際に暴風雨に遭って、浜田海岸に漂着した。玉山玄堤和尚が海岸近くにむすんだ呑海庵。今は地蔵菩薩が残り、右手に錫杖（僧侶が持つ魔除けの杖）、左手に宝珠（玉葱のような形の仏の持ち物）のようなものを持つ。
<トイレが玉山禅師上陸之地記念碑の近くにあり>

14:20 20.永小原町の「小浜観音と古石塔群」：小浜観音は子安観音である。観音堂の横に、鎌倉中期から戦国期にかけての藤原姓称寝氏（富山氏）、肝付氏の石塔が混在する。

15:00 鹿屋市役所に到着予定

II 史跡の詳細説明

1. 永野田町の「永野田観音」

観音経信者の政治家・永田良吉が東京の浅草寺（1400年近い歴史をもつ観音霊場）から入手した観音像を、昭和13年11月に永野田部落民が安置した。同内に4体あり、中央は聖観音像、木造体、青磁1体、他1体ある。昭和47年10月永野田振興会が観音堂を再建した。観音経では、観世音菩薩がよく衆生の諸難・苦悩を救済することを説く。良吉の揮毫で多いのは観音経の「施無畏」（人に恐れを抱かせないこと）である。



2. 永野田町の「澱粉工場」

東京の大倉財閥（今も高級ホテルのホテルオオクラを経営）が鹿児島県下に最新鋭の澱粉工場8工場を造ると永田良吉（明治19生～昭和46年没）が聴いた。肝属郡の工場の設置場所は内定していたが、大正6年（1917年）に31歳で大始良村長になった良吉が、2週間後に猛烈な誘致運動を起こし、担当専務を鹿児島市に尋ね2週間も滞在して、自宅前の土地をタダ同然で提供して永野田に工場誘致した。2年後の大正8年（1919年）に日本澱粉を誘致（今は西阪澱粉）し、現在も操業中（創業から104年目）。従来の澱粉工場の動力は水車であったが、初めて電力になり、製造能力が約10倍になった。カライモの価格が2～3倍になり、地元農家のカライモが高価な換金作物になった。鹿屋の初期の大型誘致企業である。



3. 永野田町の「国司塚」

奈良時代、和銅6年（713年）に、大和朝廷は日向国（宮崎県と鹿児島県の本土部分を含む広域）から分国して大隅国が設置され、国衙（国の役所）が今の霧島市国分あたりに置かれ、朝廷の支配下に入るようになった。720年に大隅国初代国司・陽候史麻呂（やこのふひと・まる）が国内巡検のため鹿屋に入ったところ、大隅隼人に殺害される事件が起こり、これを契機に1年半に及び大隅国内は朝廷対隼人の争いが勃発した。



大隅隼人に急襲された国司側は、大始良方面へ逃げたが、追って来た隼人軍と今の星塚あたりで戦い国司方は次々と倒れた。国司は下の名貫川を渡って早馬が丘に駆け上がり、馬をそこにつなぎ自殺を試みたが死にきれず、下の泉にすべり降りて水を飲み、そのまま息絶えたと伝わる。その場所がこの「国司塚」（国司どん）であり、当時の戦死者を供養するための塚であると伝承されている。郷土史家の異説もある。

永田家の氏神はこの国司どんの山であるといわれていて、年貫神社の宮司が、毎年旧暦10月の中丑の日に祭祀に臨む。塚でお供えする金幣18本・白幣36本の合計54本の準備も、毎年、宮司が自生の竹を切って手作りする。さらに永田家では餅、野菜、果実などを供える。永田家では、1,200年有余年こうして祀ってきた。この場所は、女性が入ると女性に災いがある（数人の実例がある）として、「女人禁制」となっている。

4. 永野田町の「庚申塔と田の神様」（車窓から）

庚申等は青面金剛像で四臂左手に日輪（太陽）、右手に月輪（月）を表し、左手に弓、右手は不明である。二鶏（雌・雄）、三猿（見ざる、言わざる、聞かざる）が配されている。田の神様は如意輪観



音像で、裏面に天保八（1837年）八月とある。道の十字路横にある。

5. 吾平町の樋渡橋「庚申塔」

青面金剛（しょうめんこんごう）僧で左手に四臂日輪（太陽）、右手に月輪（月）を表し、左手に弓、右手は不明である。二鶏（雌・雄）、三猿（見ざる、言わざる、聞かざる）が配されている。

庚申信仰の本来の姿については、いくつかの考え方があり。人間の体内にいる三尸（さんし）の虫が、60日毎に巡る干支の庚申（かのえさる）の夜に天にのぼってその人の罪過を天帝に告げるために命をちぢめられるとする中国の道教の教えに、仏教的な信仰が加わったとする考えが一般的である。そのため「長生きしたければ、三尸（さんし）の虫が天帝の元へ行かないように庚申の日は一日中眠ってはならない」と伝えられてきて、集落の人々が集まって一晩を明かした。

信仰は平安時代の頃には貴族社会で行われるようになり、鎌倉・室町時代には武家社会にも広まったようである。鹿児島では江戸中期以降に農村で信仰され、造塔が盛んになる。庚申塔の形態は、角柱（墓石形）のものが最も多く、次いで駒形、舟形等となっている。庚申塔の中央に彫られる主尊は、ほとんどが青面金剛で、他には地藏菩薩や特定の尊像を彫らずに文字だけのものも若干みられる。一般的な庚申塔の形は、邪鬼を踏みつける青面金剛が中央に立ち、青面金剛の神使（しんし）である三猿（さんえん）は、見ざる、聞かざる、言わざるという謹慎の態度を示すと言われる。日待（ひまち）・月待（つきまち）信仰を意味する日月や、にわとりなども彫られる。

鹿屋市には33基の庚申塔の石像が確認され、県下で最も多い地域である。高隈地区には庚申塔の石像がなく、掛け軸形式の絵が使われた。



6. 南町の「含粒寺」

含粒寺はもともと吾平町門前にあった寺で、南北朝時代、島津7代元久の子仲翁守邦が開山し、明治2年廃寺となった後、南の玄朗寺と合体させて含粒禅寺としたものである。

この石像群は見事で、仁王像4体（吾平にあった含粒寺の像2体を含む）、地藏2体、観音像、薬師などが残る。特に門の前にある六地藏塔〔主に戦国時代に盛んに造られた石塔で、側面に6体の地藏像が彫られているという特徴がある〕は永禄8年（1565年）の庚申供養に結集した40数名の氏名が笠石の裏に墨書きで記されている。人は生前の行いにより死後に6道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）のいずれかの道を行くが、それぞれの道に立ち衆生を導き、苦しみや災いを救うのが6種の地藏であるとされる。鹿屋地方には、六地藏信仰と庚申信仰の習合体が極めて多いが、この六地藏は県下で一番古いものである。庚申塔とみなす専門家もいる。

参道横の石塔群は、もと南町山下（やまげ）にあったものを、この地に移転したものである。これは、天正元年（1573年）に18代肝付兼亮（かねあき、兼統の次男）が日向国の伊東氏とともに、陣ヶ岡を超えて禰寝氏領に攻め入るに当たって建立した逆修供養塔である。逆修とは、生前にあらかじめ自分のために仏事を修めて、死後の冥福を祈ることである。



7. 南町の「烏ヶ山（からすがやま）の観音像・月待供養塔」

観音は、聖（しょう）観音で容姿端麗で造形美と年代の古さ（享保18年、1733年）で第一級のものである。庚申講に入った人達が作った、庚申信仰と観音信仰が合わさったものである。

月待供養塔は、江戸時代中期に作った月輪（がちりん）を背負った如意輪観音で、県下に少ない珍しいものである。月待塔（つきま



ちとう)は、日本の民間信仰。特定の月齢(、十五夜、十六夜、十九夜、二十二夜、二十三夜など)の夜に集まり、飲食を共にしたあと、経などを唱えて月を拝み、悪霊を追い払うという宗教行事である。月待行事を行った講中で、供養の記念として造立した塔である。月待信仰塔ともいう。

8. 南町の「兼成の墓」(車窓から)

観応2年(1351年、南北朝期)、肝付氏は離反した大始良一族(横山城)を攻めた。この「横山の合戦」で勝った肝付兼成は、肝付8代兼重の弟で五郎九郎と称した。夕刻、軍を率いて南の内城に帰る途中、現在の烏ヶ山で路傍の竹藪の中に隠れて帰りを待ち伏せていた志々目藤三義貞に殺された。兼成の墓は、南町山下(やまげ)の畑の中にあり、昔はかなり大きな塚であったというが、次第に侵食されて、今は「肝付兼成戦死之地」と彫られた石碑があるだけである。



9. 獅子目町の「清水の石塔群」

この石塔群は鎌倉時代からこの付近一帯を支配した志々目氏一族(富山氏の出)の供養塔群と、南北朝期この地方に進出して来た建部姓称寝氏の逆修供養塔群、享禄3年(1530年)大始良地方に進出した肝付氏一族の橋口但馬守(肝付兼成の次男の子孫)等の供養塔群、分禄元年(1592年)梅北の乱に連座して、誅殺された大始良地頭の伊集院三河守久光の133回忌の追善供養塔、ならびにこの正面にあった大恵寺(正応寺ともいう)の歴代住職の供養塔群に大別される。鎌倉から江戸時代にわたる長期間の一大供養塔群である。付近一帯に散乱、埋没していたものを復元したもので、まだ周囲に埋もれたものもあると推定される。氏別に配列されている。



ここは通称『三河どん』と称され、この地区では毎年清浄の地として清掃されている。大始良地方の中世、近世の歴史を知る上からも、信仰、石塔の持つ意義を知る上からも文化財として高い価値を持つ石塔群である。

志々目氏は富山氏の出である。富山氏は宮崎に下向し、島津荘(都城)の荘園管理者として都城に来た。その後、高山の宮下そして、ここ大始良に来た。さらに一族は、大始良氏、獅子目氏、横山氏、浜田氏と分かれてそれぞれが繁栄した。

文禄元年(1592年)の「梅北の乱(梅北一揆)」に連座した咎で一族、家臣63名と共に断罪(斬殺)されたという大始良地頭の伊集院三河守久光の追善供養塔がある。享保9年に建てられ、久光と息子(兼丸)の戒名が彫られている。この供養塔は大恵寺の僧が伊集院三河守久光とその息子(倭子)の133回忌に建てた追善供養碑である。幼い息子(倭子)だけは助けたいと思った久光は、家宝の刀を倭子(わこ)に託し、護衛の家臣を一人付けて浜田の呑海庵(玉山玄堤和尚が建立)に逃がす。しかし、家宝の刀に目がくらんだ家臣に殺された。その殺された場所が「倭子の下」という所である。伊集院三河守久光の墓と伝えられる自然石が大始良の県道脇にある。

「梅北の乱」は梅北国兼(肝付一族で、戦国時代に至り島津氏に従った)が豊臣秀吉

に謀反を起こした事件である（文禄元年、1592年）。当時、梅北国兼は帖佐地頭（重富）の職にあり、秀吉が朝鮮征伐のため佐賀の名護屋城に居る時、秀吉を暗殺しようと企てて失敗する。その時の一味に伊集院三河守久光の家臣も大勢いたため、伊集院三河守一族にも類が及び、秀吉の命令で三河守久光以下、女、子供赤子を問はず、一族64名が上田原で誅殺された。

10. 大始良町「参河（みかわ）神社跡」

豊臣秀吉が挑戦に侵攻するときの「梅北の乱」に大始良地頭であった伊集院三河守も連座し、一族全員64人が処刑された。三河守は一子兼丸だけは浜田の呑海庵に逃がそうとして、家来に家宝の刀を持たせ大始良を出そうとした。ところが途中で家来は刀が欲しくなり兼丸を殺して刀を取った。その時、雷光があり家来は死に刀はどこかへ飛んでいったという。その刀が落ちて来た所が大始良麓であったという。一族全員処刑後に疫病が流行り、死者が続出したので、土地の人々はこの地に参河（三河）神社を建てて三河守一族の霊を祀ったという。



ここは大始良13城の1つの三河城跡である。一説によるとシラス採掘で城跡が崩され、社殿は岩戸神社に移されたという（真偽は不明）。この場所から先が麓地域である。なお、神社入口の横に梅北家の墓地があるが、参河神社とのかかわりは不明である。

11. 大始良町の「岩戸神社」

横尾岳の御在所山8合目のあたりに、高さ周囲共20米程の巨岩があり、その東側と北側は断崖になっている。巨岩の南側直近に2つの石が人字型に寄り重なり、トンネルを形成している。御神体はこの巨岩であり、岩戸宮と称され、現在は岩の前に小社を建て、龍人頭の木像を安置して御神体としている。現在地の社殿は、参拝者の便を計り、遥拝所近戸（ちかど）宮として造立されたものである。創建は詳らかでないが、永禄11年（1568年）3月、肝付氏の臣という鳥越刑部左衛門尉岩吉が再興したと伝える。またその後、明暦4年（1658年）3月本殿が改修され、大工児島平左衛門とある。この神社に奉納される棒踊りは、鹿屋市指定無形文化財である。



諸種の流行病、特に痘瘡を軽くする神として知られ、流行の折は遠くから参詣人が訪れたという。早魃のときに雨乞いをすれば、3日の内に降雨あらざるなしと言い伝える。また、岩戸宮の岩の上の水たまりに鮒二尾と白鶏が住んでおり、これを見ると盲目になるといい、そのためこの地では鮒を取らないという伝えもある。

鳥居の右側に荒平石の庚申塔がある。彫りの深い青面金剛像八臂で、8本の腕を持つ像はあまり例のない珍しい庚申塔である。天邪鬼を踏みつけ、二鶏、二童子、月輪、独鈷、槍を持つ。

12. 大始良町の「教育者・池田俊彦宅跡（今は孫が住む）」（車窓から）

『鹿屋市史下巻』（平成7年発行）には「池田俊彦」について、以下のように書かれている。『大始良の生んだ教育者、一生を教育会に捧げた人である。明治13(1880)年旧大始良郷麓の池田彦太郎の長男に生まれた。幼少から秀才といわれ、大始良小学校から鹿児島県第一中学校に入り、七高造士館を経て東京帝国大学の西洋史学科を卒業した。おそらく当時の大始良においては、このような学歴を持った人はほかにいなかったと考えられる。

卒業後は東京市麻布中学校の教諭を勤め、大正7年に学習院教

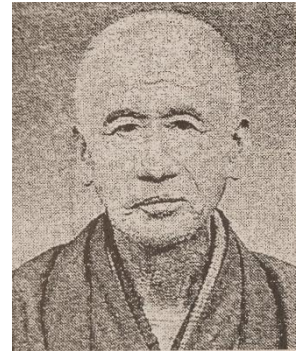


授となった。在任中、一か年にわたり欧米の教育状況を視察した。昭和4年学習院を辞任し、郷党子弟の教育に尽くすため鹿児島県立第二中学校(現甲南高等学校)校長に就任した。在職17年、昭和20年の敗戦の年に退職、その後、本県教育会長となり混乱した教育会の立て直しに努力した。昭和41年、郷党の士が図って大始良小学校の校庭に顕彰記念碑を建てた。著書に「西郷とリンカーン」「島津斉彬公伝」がある。』

学習院教授の時に昭和天皇の家庭教師をされ、昭和24年に鹿屋に来られた昭和天皇と再会された。(明治13年生～昭和26年没)

13. 大始良町の「初代町長・竹内三平宅跡の竹藪」(車窓から)

『大始良の歴史と文化』に、大始良村初代村長・竹内三平の行動、精神と後輩への影響についての以下の記述がある。『寡黙で「不言実行」を旨とし、政治家にありがちな公金をはじめ金銭に関するトラブルは一切なく、金銭面での潔白さを身上とした。売名行為とは無縁のところでは人材の養成や発掘には私財を投じ、その精神が後進に生かされて、永田良吉氏(第12代村長、県議、鹿屋市長、代議士)、池田俊彦氏(学習院教授)、五代貞直氏(教育者)、大川喜之助氏(茶業界の恩人)、中島万助氏(産業組合育ての親)、津崎長角氏(産業組合の振興)等の人物を輩出させている。』鹿屋発展に尽くした人材を育成した郷土の偉人である。



竹内三平 村長

産業面における活動も多大であったが、明治40年代は耕地整理組合長に就任し、獅子目、横山、南、西俣などの耕地整理事業に着手した。道路問題も重要事項で、従来の大始良方面の主要道は、藩政時代そのまま、高須から上浜田を経て瀬筒、大始良麓に至り、獅子目台地に上りまた下って南楠原の台地に上り、南より吾平に出るという曲がりくねった道路であった。それを明治43年より直線的に走る道路に改めるための工事にかかり、44年完成した。延長約16km、これに対し村民の間に不平、不満の声も聞かれたが、村政100年の大計のために完遂させた。(安政元年生～昭和16年没)

14. 大始良東集落センター横の「篠塚板碑・忠魂碑・西南役記念碑」

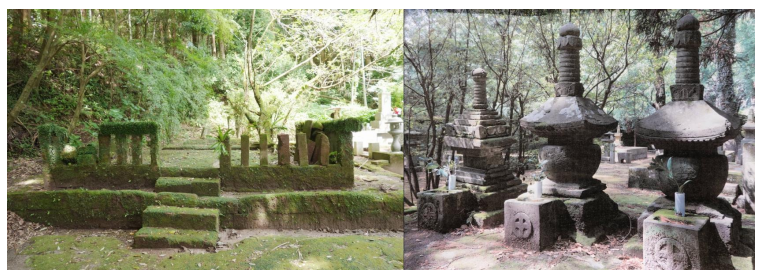
篠塚板碑は、現在は大始良東集落センターの横に移してあるが、大始良城址の東側に当たる現在の市営住宅の場所にあった。この地は、島津7代藩主になった元久誕生の際に、「イヤ」(胎盤)を埋めた所だとも言われている。この板碑は、室町期の応永12年(1405年)に島津元久が建立したと思われ、少しだけ墨書が残っている。



西南戦争の忠魂碑には、表に川口雪蓬の書と思われる文字が、裏に4名の戦死者の名が彫られている。西南役記念碑には、西郷軍として出征した約40名の兵士の氏名と年齢が刻まれている。最初に竹内三平21才(大始良村初代村長、満年齢で19歳)、次に池田彦太郎17才(有名な学習院大教授・俊彦氏の父親、満年齢で15歳)の名がある。

15. 大始良町の「龍翔寺跡」

日本百僧の一人に数えられる名僧の玉山玄堤(ぎょくざんげんてい)和尚が、大始良城主の楡井頼仲の招きにより、鎌倉末期に大始良に「瑞雲山龍翔寺」を建立して初代住職となった。当地方で最も古い寺である。この寺は560年ほど続いたが、明治初年からの廃仏毀釈で壊された。



この寺には、大隅の守護（今の県知事）となった島津6代氏久（1328～1387年、南北朝期）の遺命により氏久夫婦と娘の三世涯月（けいげつ、住職）の墓碑があったが、昭和50年ころに鹿児島市の島津墓地（福昌寺跡）に移された（前ページの写真の右）。今は大きな石柵だけが残っている。玉山和尚は、後に楡井頼仲の求めにより志布志に移り、大慈寺を建立した。

石柵の横には小さな共同墓地があり、そこには池田俊彦氏（昭和天皇の家庭教師、学習院大学教授、県立第二鹿児島中学（現甲南高）校長、県教育会長）の一族の墓の他に、五輪塔や古い自然石の墓などがある。

16. 大始良町の「大始良城と八幡神社」（行かずに遠望）

鹿屋市大始良町麓にある大始良城は、平安末期の12世紀の頃（1182年～1183年）、藤原姓禰寝小太郎義明（富山氏とも称する）によって築かれたとされる。その子孫は繁栄し大始良、横山、志々目、浜田の各氏に分かれてその邑を受け継いだ。



大始良町麓にある内城（看経城；かんきんじょう）を中心に12の支城があった。即ち、内城、松尾、西野、野頸、富山、三河、蜂須賀、尾勝、中之、東之、南之、獅子目、浅井城が散在する。その後、肝付氏に属したり、南北朝時代、志布志の楡井頼仲が攻め寄せ居城し、後に大隅守護職の島津6代氏久が大始良に入った。氏久の子、元久（島津氏7代）も大始良城で正平18年（1363年）に誕生している。氏久は元久の成長を願って大始良城下に若宮八幡宮を建立した。これが現在の八幡神社である。元久が誕生して時、八幡神社下の繁昌家がうぶ湯を献上して氏久から喜ばれ「世々繁昌」の言葉を賜り、以後、「繁昌」という姓を名乗るようになったと伝えられる。下って戦国時代になると享禄三年（1530年）に15代・肝付兼興（かねおき）が大始良を占領、その武将橋口但馬守が大始良城の主となる。以後、天正五年（1577年）に島津氏に降るまで47年間肝付氏の所有となる。大隅の中世を見れば、ここ大始良城は、肝付氏が数百年に亘り居城していた高山本城と双璧をなす代表的山城といえる。

17. 大始良小学校の「池田俊彦先生顕彰碑と3戦役慰霊碑」（車窓より）

池田俊彦の郷里・大始良の有志が図って、没後15年の昭和41年に大始良小学校校庭に建てた顕彰碑。近くに日清・日露・大東亜の戦役の慰霊碑もある。平日にしか見学できない。



18. 大始良町の「倭子の下」（車窓より）

三河守久光の息子・倭子（兼丸）が奸臣に殺されたと伝わる所で、傾斜の急な小高い丘の上に石碑がある。瀬筒峠に上る前の、県道のバス停（永吉）近くの藪の中である。



19. 浜田町の「玉山禅師上陸之地記念碑」と「呑海庵跡」

日本百僧の一人に数えられる名僧の玉山玄堤（ぎょくざんげんてい）和尚は、若い頃に京都南禅寺の大明国師の跡とりとなり、後に2回唐に渡って修行した。2回目の帰国の際に暴風雨に遭って、「芦ヶ（あしが）港」と呼ばれた浜田海岸に漂着し（海岸に「玉山禅師上陸之地」記念碑がある）、海岸近くに「呑海庵」をむすんで臨済宗の寺とした。先年この呑海庵跡と称する老蘇鉄（今は無い）の下を発掘したら、仏具や鶴亀像等が出土したという。玉山



和尚は、後に楡井頼仲に招かれて大始良麓に龍翔寺、その後の興国元年（1340年）に志布志に大慈寺を開山し、正平6年（1351年）に生きながら入定した。

呑海庵跡にある地藏菩薩が、以前は林の中に隠れるように置かれていた。最近、林が伐採されて、地藏菩薩の左半身が、切られたハゼの木に呑み込まれるような姿で、道路横にある。この地藏菩薩は、右手に錫杖（僧侶が持つ魔除けの杖）、左手に宝珠（玉葱のような形の仏の持ち物）のようなものを持っておられる。故隈元信一氏によれば江戸時代前期の作とのことである。

20. 永小原町の「小浜観音と古石塔群」

小浜観音は子安観音（安産をかなえ、幼児の無事を守るとされる観世音菩薩）である。観音堂の横に、鎌倉中期から戦国期にかけての藤原姓称寝氏（富山氏）と肝付氏の石塔（15基の五輪塔と多数の残欠）が混在する。

